

突厥

支那

27. IX (jätinč 第七の義)

7. VII

26. XII (onunč 第十の義)

VIII

IX (jätinč 第七の義)

VI

なり、されば突厥の年の初めは支那のよりもほゞ三ヶ月程早かりしものなり(要約)といへり、此の中第三の例は如何なる事實を對比したるものなるか、今余の知り能はざる所なれども、他の二者につきては何れも正鵠を得たるものなりと信ずる能はず、第一の例に就きて考ふるに、闕特勤碑は漢文にて開元廿年歲次壬申十月辛丑朔七日丁未建之と記せども、此の年の十月は辛未の朔にして、其の七日は丁丑なれば、此の月日の誤れることはいふ迄も無きことなると共に、十月が九月の誤に外ならざること一見して明らかなり、これ此の年の九月の朔日は實に辛丑にして、其の七日は丁未に相當すればなり、(其他の理由は今省略に従ふ)、されば Marguart 氏が Thomsen 氏の論述に據りて之を七月七日と見たるは、誤にして採るに足らず、之を對比する時は、

突厥の猿の年第七月(即ち九月)二十七日は

唐の壬申歲

九月

七日に當る

次に第二の場合に就きて考ふるに、氏が默棘連の死を八月と見たるは、また Thomsen 氏が *Inscription de l'Orkhon*, p. 79 n. 1 に引ける所を基とせり、Thomsen 氏が *Mémoires concernant les Chinois*, XVI, 26 によれりと註記せるものは今余輩の見る能はざる所なれども、然も可汗の死せる年月は明らかに冊府元龜卷九七五に記されて、開元二十二年「十二月庚戌(二十三日)突厥毗伽可汗小殺爲其大臣梅錄廢所毒而卒、帝悼之輟朝三日」と見え、且つ此の時に於る詔をも載せたり、されば之によれば

突厥の犬の年第十月(即ち十二月)二十六日は

唐の甲戌歲

十二月二十三日